日本の作家27

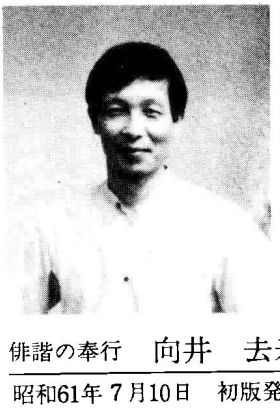
大内初夫・若木太一著

俳諧の奉行

# 向井去来

新典社

大内初夫（おおうち　はつ
昭和３年８月16日，大分県
昭和27年，九州大学文学部
昭和30年，同大学院(旧制)修了。
文学博士
現職　鹿児島大学教養部教授。
専攻　俳諧史。
主著　『芭蕉と蕉門の研究―芭蕉・洒堂・野坡　考証と新見』(昭43，桜楓社)，『近世九州俳壇史の研究』(昭58，九州大学出版会)他。
現住所　〒891-1 鹿児島市上福元町4287-5



若木太一（わかき　たいいち）
昭和17年５月20日，鹿児島県生まれ。
昭和41年，鹿児島大学教育学部卒業。
昭和45年，九州大学大学院修了。
現職　長崎大学助教授。
専攻　近世文学。
主要編著　「去来先生全集」（共編，昭57，落柿舎保存会刊），「詩人の風景―向井去来―」（昭58・９～10，長崎新聞）
現住所　〒852 長崎市白鳥町10-22-404

俳諧の奉行　向井　去来　　日本の作家　27

昭和61年７月10日　初版発行　　定価　1,500円

著者　大内初夫
　　若木太一

発行者　松本輝茂

発行所　株式会社　新典社

東京都千代田区西神田３―５―６大坂ビル
ＴＥＬ　東京（03）265―3781，3863
振替口座　東京７―２６９３２　〒101

検印廃止，不許複製

㈱萬友社，牧製本印刷㈱

ＩＳＢＮ４―7879―7027―５　Ｃ0395

日本の作家27

大内初夫
若木太一

# 俳諧の奉行　向井去来

新典社刊

編集委員

秋山虔・有吉　保・犬養廉・井上宗雄・岡　保生・片桐洋一・片野達郎・木俣修・小林茂美・今栄蔵・神保五弥・塚原鉄雄・橋本不美男・藤平春男

『芭蕉堂歌仙図』（明和七年刊）所収

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

**向井去来**（むかい　きょらい）慶安四年（一六五一）～宝永元年（一七〇四）。江戸時代、元禄期の俳人。蕉門十哲。肥前長崎（長崎県長崎市）に儒医向井元升の次男として生まれる。幼名は慶千代。通称は喜平次・平二（次）郎。諱は兼時。字は元渕。号は義焉子・大井里睡壁民・落柿舎。兄に元端（号震軒）、弟に元成（俳号魯町）・利文（俳号牡年）、妹に千代（俳号千子）などがあり、九人兄弟。

万治元年、八歳の折に父に随って京に移住し、十六歳の頃から叔父久米諸左衛門利品（升顕）に養われ、筑前福岡にあって武芸の修業に励んだ。久米家に後嗣が生まれたこともあって二十五歳の頃に京に帰った。兄の医業を扶けて家政につとめたが、武士として主取りすることもなく、三十年来の浪人として生涯を終えた。

俳諧は、貞享元年上方旅行中の其角を介して蕉門に近づき、翌二年刊の『一楼賦』に「五日経ぬあすは戸無瀬の鮎汲ん」「雪の山かはつた脚もなかりけり」の二句が初出する。この頃から文通により芭蕉の教えを仰ぎ、同三年秋には妹千子と伊勢に旅し、『伊勢紀行』が成った。同年冬江戸に下って初めて芭蕉に対面し、また其角・嵐雪とも風交を重ねた。同四年の『続虚栗』や元禄二年の『阿羅野』に発句多数が入集し、しだいに蕉門においてその存在を認められた。元禄二、三年上方旅寝中の芭蕉に親炙して新風についての教えを受け、同四年には別墅落柿舎

にしばらく芭蕉をとどめた。同年秋、凡兆と『猿蓑』を共撰した。この頃、蕉門の高弟としての地位は不動のものとなり、同七年には酒田の不玉や井波の浪化に宛てて蕉風の要諦にふれた長文の俳論書簡を書き送っている。芭蕉没後は、同八年浪化を扶けて『有磯海』『となみ山』を上梓し、また卯七と『渡鳥集』を共編して宝永元年に刊行した。元禄十年には許六との間に俳論の応酬があり、同十一年から翌十二年にかけて長崎にて『旅寝論』を著し、最晩年には『去来抄』を書き残して、聖護院の森の近くの家に没した。東山真如堂に葬る。家族は妻可南女との間に登美・多美の二女があった。追悼集に吾仲・元察編『誰身の秋』（宝永二年刊）、卯七編『十日菊』（同年刊、原本未発見）などがある。

儒家に生まれ、武士的気概をもって元禄の世に生きた去来は性高潔にして篤実な人物であり、蕉門随一の人格者として、師芭蕉の信頼と同門の衆望とを集めた。芭蕉は戯れに去来を俳諧奉行に擬したという。師風に忠実で師説を守ること篤く、二、三の俳論書を著したのも、これを正しく後世に伝えようとしたためであった。作風はその人柄がそのまま反映しており、小手先の技巧を嫌い、実情・実感を重んじ、高雅清寂の詩境を愛した。

# 目次

去来の輪郭……五
主要人物解説……一一
向井家略系図……一四

第一章　生い立ち

1　父祖……一五
2　青少年期……一九

第二章　芭蕉入門

1　俳諧初学……二八
2　伊勢への旅……三四
3　江戸下向……四一
4　妹千子の死……四八

第三章　元禄初年
1　其角の上京……五一
2　熊野と長崎への旅……五五
3　「落柿舎の記」……五九
4　『阿羅野』入集……六四
第四章　『猿蓑』のころ
1　湖南の芭蕉……六九
2　可南女……八〇
3　連句修業……八三
4　嵯峨の日々……九一
5　『猿蓑』の刊行……一〇一
6　牡丹の献上……一一〇
第五章　同門との雅交
1　『己が光』の句文……一一五
2　呂丸の客死……一二一

3　落柿舎の普請……一二六

第六章　芭蕉との永訣

1　不玉宛論書……一三四
2　芭蕉の上洛……一四一
3　芭蕉の臨終……一四九

第七章　蕉門の重鎮

1　「俳諧奉行」として……一六一
2　許六との「俳評論談」……一六六
3　『有磯海』『となみ山』の刊行……一八三
4　田上尼との西国順礼……一八五
5　『おくのほそ道』の書写……一九五
6　俳交—芭蕉三回忌のころ—……一九九
7　「俳諧問答」……二〇四

第八章　長崎への旅

1　傷心の季語……二一六

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

2 『渡鳥集』の旅……二三〇
3 牡年亭夜話……二三四
4 丸山の賦—前・後—……二四〇
5 長崎の町—故郷—……二四六
6 支考との別れ……二五二
7 「千歳亭記」—田上尼の草庵—……二五六
8 句会と『旅寝論』の執筆……二五九

第九章 『去来抄』の執筆まで

1 帰宅のよろこび……二七三
2 友人たちの死……二七六
3 晩年の日々……二七八
4 終焉—『去来抄』草稿—……二七九

去来資料一覧……二八二
主要参考文献……二八三
去来略年譜……二八六
あとがき……二九五

# 主要人物解説

**元端**　慶安二年（一六四九）～正徳二年（一七一二）　向井氏。去来の兄。震軒とも号する。儒医。

**魯町**　明暦二年（一六五六）～享保十二年（一七二七）　向井氏。名は元成。去来の弟。長崎に住した儒家。

**牡年**　万治元年（一六五八）～享保十二年（一七二七）　久米氏。名は利文。去来の弟。長崎住。町年寄。俳号は初め暮年。

**千子**　？～貞享五年（一六八八）　向井氏。名は千代。去来の妹。清水藤右衛門に嫁す。

**田上尼**　正保二年（一六四五）～享保四年（一七一九）　蓑田氏の出、久米利延の妻。名は勝。去来の叔母。牡年の養母。長崎住。

**卯七**　寛文三年（一六六三）～享保十二年（一七二七）　蓑田氏。通称八平次。十里亭。田上尼の甥で、去来の義理の従弟。長崎唐人屋敷の組頭。

**素行**　？～享保十七年（一七三二）　久米調内。長崎の為替取次役。去来の弟牡年の義理の従弟。

**芭蕉**　正保元年（一六四四）～元禄七年（一六九四）　松尾氏。初号宗房、のち桃青。伊賀上野の出身。江戸住。蕉風の開祖、去来の師。

**其角**　寛文元年（一六六一）～宝永四年（一七〇七）　榎本氏、のち宝井氏。別号晋子など。江戸の住で、蕉門の高弟。

**嵐雪**　承応三年（一六五四）～宝永四年（一七〇七）　服部氏。江戸の住で、蕉門の高弟。

**凡兆**（加生）　？～正徳四年（一七一四）　野沢氏（宮城氏とも）。京の医、名は允昌。加賀出身。元禄七年事に坐して入牢。のち大坂に移る。

**羽紅**　生没年未詳。凡兆の妻。名はとめ。

**酒堂**（珍夕・珍碩）　？～元文二年（一七三七）　浜田氏、のち高宮氏。近江膳所の人。元禄六年夏に大坂に移り、同十年膳所に帰住する。

**史邦**　生没年未詳。中村氏。尾張犬山の人。仙洞御所に仕え、のち京都所司代与力。元禄六年秋江戸に移る。

**丈草**　寛文二年（一六六二）～元禄十七年（一七〇四）　内藤氏。前号無辺。尾張犬山の人。遁世して京や近江に住む。

**之道**（諷竹）　万治二年（一六五九）～宝永五年（一七〇八）　槐本氏。大坂の住。はじめ来山門で東湖と号する。のち蕉門。

**支考**　寛文五年（一六六五）～享保十六年（一七三一）　各務氏。美濃北方の人。野盤子・見竜とも号する。元禄三年芭蕉に入門し、当時は主に伊勢などにあり。

**素牛**（惟然）　？～正徳元年（一七一一）　広瀬氏。美濃関の人。郷里を出て漂泊の生活を送る。

**浪化**　寛文十一年（一六七一）～元禄十六年（一七〇三）　越中井波瑞泉寺十一代の住職。元禄七年落柿舎に

おいて去来の手引きで芭蕉に入門する。

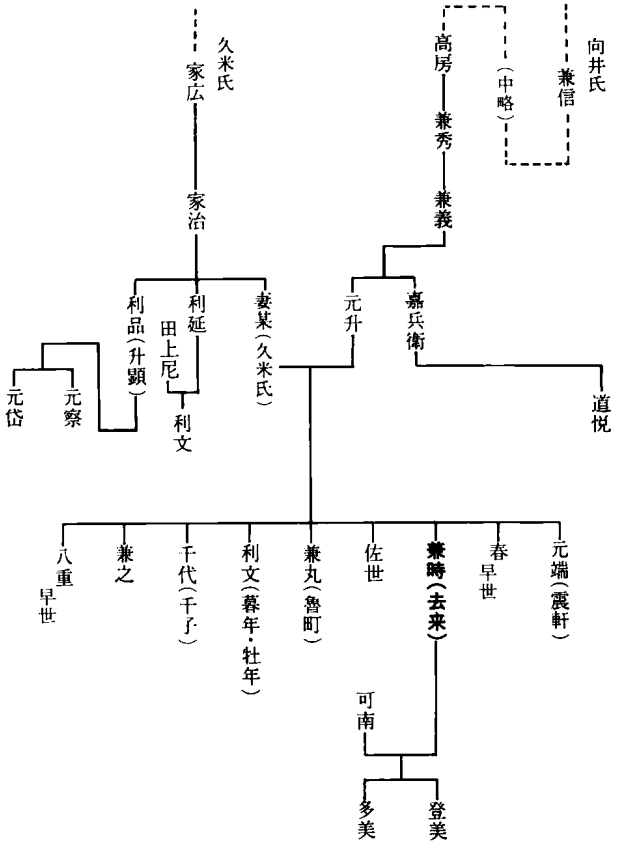
**許六**（きょりく）　明暦二年（一六五六）～正徳五年（一七一五）　森川氏。五老井など号する。近江彦根藩士。元禄六年帰国後去来と親交を持つ。

**風国**（ふうこく）　？～元禄十四年（一七〇一）　伊藤氏。京の医。特に去来に兄事する。

**野童**（やどう）　？～元禄十四年（一七〇一）　京の住。仙洞御所に勤める。去来に兄事する。

**鳳仞**（ほうじん）（野明（やめい））　？～正徳三年（一七一三）　坂井氏。もと筑前福岡藩士。浪士となり嵯峨住。去来に特に兄事する。

# 向井家略系図


向井氏
兼信
（中略）
高房
兼秀
兼義
久米氏
家広
家治
元升
嘉兵衛
道悦
妻某（久米氏）
利延
田上尼
利品（升顕）
利文
元岱
元察
元端（震軒）
春早世
兼時（去来）
佐世
兼丸（魯町）
利文（暮年・牡年）
千代（千子）
兼之
八重早世
可南
登美
多美

# 第一章　生い立ち

## 1　父　祖

『慶安太平記』で知られた由井正雪や丸橋忠弥らの浪人たちによる幕府転覆の企てが発覚し、物騒な風聞が世間をさわがしていた慶安四年(一六五一)、ここ筑紫長崎の後興善町の儒医向井元升宅に元気な男児が呱々の声をあげた。幼名を慶千代、のちに諱を兼時、字を元渕、通称を喜平次・平二郎(又は平次郎)といった俳人去来である。当時父元升は四十三歳で、同地にあった孔子廟――聖堂の祭酒をつとめていた。聖堂のかたわらには学塾もあって、元升はここで門弟たちに学問を教えていたのであり、祭酒といえば、さしづめ今日の大学の学長に当たるであろう。母の名は定かでなく、年齢はこのころ二十三、四か。元升との間に三歳の長男元端と二歳の長女春とがあった。家族はほかに元升の父兼義と母キタ夫婦も健在であり、また元升の兄嘉兵衛の未亡人満、その子道悦も身を寄せており、向井家一家はまことに賑やかであった。

向井家はもともとこの長崎の地の者ではない。元升が九歳の時、父兼義が肥前神埼郡(佐賀県)

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.